すべての夜に輝く夏の果実

高坂　均

「奥秋さんは、今、何している？」
と、小沢は二十年ぶりに会った近藤にたずねた。
「実家に戻ったけど、具合が悪くて、また施設に戻った」
近藤はノンアルコールのビールを飲み干し、パラソルのかかった丸テーブルにグラスを置いた。小沢は缶に残った液体を近藤のグラスに注いだ。友人の表情は固かった。
皿の中の果物の盛り合わせが濃いにおいをただよわせている。小沢はドリアンを避け、マンゴーをつまんだ。皮を剥いた瑞々しい果実が、朝の光に輝いている。ホテルの屋上のテラス席だったが、風はほとんど吹いていない。パラソルの影からはみ出た腕が暑かった。小沢は椅子を動かした。まだ八時過ぎだったが、強い陽射しは、真昼のようだった。
「藤井先輩は、今どうしているのかな？」
小沢はまた別の知人について聞いた。テラス席はカラフルな服装のフランス人の団体客でほぼ満席状態だった。白シャツにネクタイ姿の近藤は、周囲から浮いていた。人を呼んだが、どのボーイも忙しそうだった。
「地元の信用金庫を定年で辞めて、嘱託待遇で支店の渉外係を何年かやった。今はシルバー人材センターで、たしか市役所の駐車場係をやっているらしい」
苛立った口調で言うと、近藤は立ち上がってビュッフェコーナーに行き、ソフトドリンクのボトルを下げて戻ってきた。グラスに注ぐと泡がたち上り、近藤は急いで口を付けて吸い込んだ。
「やれやれ。何年ベトナムにいても生ぬるいコーラには慣れないな。お前も腹下ししたくなければ、氷は入れない方が良いぞ。観光に来て、ずっとホテルで寝たきりじゃもったいない」
サイゴン川に面したマジェスティックホテルの屋上からは、対岸の熱帯雨林と、ヤシの木の間にそびえ立つ外資系企業の巨大な看板が見下ろせた。ベトナムに来て二日目の小沢

は、目にする光景がみな珍しかった。見下ろすと、あふれた水のように、無数の人とバイクが建物の間を流れている。地鳴りのような騒音がわき上がり、体の奥に響く。人もバイクも街も、鮮やかな色彩が渦を巻いていた。

水量の豊富なサイゴン川には、数千トンの貨物船から木の葉のようなサンパンまで、無数の船が行き来している。濁った川のにおいは、ホテルの屋上までは届かない。小沢は街を見下ろしながら、泥と排気ガスと埃の濃密さを想像して一瞬目をつぶり、明るいテラスに視線を戻した。

「そうだ、お前から頼まれていた現地ガイド、呼んでおいたよ。ホンという男だ。でも何でわざわざ年寄りが必要なんだ？　こっちの日本語ガイドはみな若いやつばかりだぞ」

小沢はガイドブックにはさんでおいたポストカードを近藤に差し出した。古びた絵はがきで、五十年代の巨大なアメ車の写真の裏に、手書きの英文が記されている。

「レニー・マクリーンからだ。覚えているか？」

はがきを受け取った近藤がじっと小沢を見つめた。

「もちろんだ。お前の所に来たのか」

小沢はうなずいた。

「五年も前だよ。返事を出したが、戻ってきた。ずっと放っておいたが、今度こっちに観光に来るので探し出してきた」

うなずいた近藤は、胸ポケットから老眼鏡を出してハガキを見た。裏返して眺め、文章に何度も目を走らせた。一枚のハガキというより、これから読もうとする厚い本を値踏みするような感じだった。

「来たときにいろいろ調べたよ。ハガキは、モーテル備え付けのものらしい。アリゾナ州の『ルート６６』というモーテルで、マクリーン宛に出した二通が戻ってきた後、フロント宛にも出してみた。マネージャーから返事が来て、その客は数週間泊まっていたが、もういない。行く先は知らない、荷物も預かっていない、ということだ。その後は何も連絡がない」

「驚いたな。ちゃんとやっていたんだ。少なくともアメリカに戻ったんだ、彼は」

近藤は、グラスや果物の皿を隅に押しやり、空いたスペースにハガキをそっと置いた。磨りガラスの天板の上で、絵はがきの写真が鮮やかだった。

白く塗られた平屋のモーテルの駐車場に、赤いサンダーバードがとまり、金髪娘が開けたドアから、形のいい足を延ばしている。染めたように青い空を、ジェット爆撃機が白い尾を引いて飛んでいる。「Route 66 Inn」と大きくロゴが描かれた写真は、昨日刷り上がったばかりみたいに光っていた。

近藤を送り、部屋で一休みした小沢がロビーに降りていくと、髪の毛の白いやせた男が近付いてきた。ベトナム人にしては長身で、小沢と同じくらい背丈だった。手に古びた革鞄を提げていて、どこか田舎の引退した校長を思わせる。

「小沢さんですか、私は近藤さんに紹介されたホンです」

ホンは自己紹介する小沢を、陰りのない明るい家顔でみつめた。小沢が「とりあえず」とロビー奥のカフェに誘うと、ホンは近付いたボーイにカードを見せた。

カフェの大きなガラス窓からは、行き交うバイクや、サイゴン川が見渡せる。

「失礼ですが、さっき何を見せたんですか」

「宿泊客でないベトナム人は、ホテルに入れないのです。私はここに知り合いがいるので、身分証明書を見せて入れてもらいました」

小沢は冷たいものを注文し、ホーチミンの暑さ、観光名所、道路を横断するのが大変なことなどを話題にした。ホンは穏やかな表情で微笑みを絶やさず、的確な反応をする。近藤はホンのことを七十歳くらいで、フランス留学の経験がある政府の元官僚だと話していた。彼のベトナム支社で、現地との調整役の仕事をしている。艶のある肌、引き締まった体つきなどから、引退した六十代の元軍人のようにも見えた。小沢はマクリーンのハガキを取り出した。

「これは古い知人からのハガキです。ここに書いている所に行きたいのです。彼はアメリカ人で、四十年ほど前に兵隊としてベトナムにいました。その当時の事ですから、今はどうなっているかわかりません。それでわざわざホンさんを近藤に紹介してもらいました」

「もちろん、この通りの古い人間ですから、昔のことはよく知ってますよ」

ホンは小沢を笑わせてから、ハガキを手にとってじっくり眺めた。

「ファングーラオ通りのアーカンシェル。よくアメリカの軍人さんが利用していたナイトクラブでしたね。このアニーという女性の事も気にしているようですが」

「そう、できたらその女性を探して会ってみたいのです」

ファングーラオ通りまでは、ホテルからタクシーで十五分程だった。バイクの洪水がなければ、五分もかからなかったろう。ホンが指さした古いビルは、一階が食堂、二階には「インターネットカフェ」という看板が掛かり、その上の数フロアは住宅のようだ。店の中は、麺をすすっている客でいっぱいだった。ホンはレジ係にマネージャー風の男性を呼んでもらい、数分話をした。

「近くの店のおばあさんが昔のことを知っているようです」

と、ホンは道の反対側を指さした。バイクと車の奔流の間を、泳ぐようにして渡るホンの後ろを、小沢は夢中になって追いかけた。隣のブロックの大きなホテルの脇に、日本語と英語の看板を掲げた土産物屋がある。小沢はホンのあとを付いて店に入った。薄暗い店の奥に、低いイスに腰掛けた老婆がいた。ホンが腰をかがめて何か説明すると、老婆は両手と顔を天井に向け、首を振りながら答えた。二人の話はしばらく続いた。

「おばあさんは、解放前にこの近くの市場で仕事をしていて、その店の従業員に知り合いがいたそうです。一九七五年以後は全部変わったので、昔の店の人は、誰も残っていないらしい。ただ、タインという年寄りのシクロの運転手がいるそうです、生きていれば」

ホンは小沢を見上げながら言った。

「そのシクロの人はどこに行ったら会えますか」

「場所は決まっていない。前のニューワールドホテルか、記念会堂か、ベンタイン市場か。見たら連絡してもらうようにおばあさんに言っておきました」

小沢がうなずいて、ポケットの財布に手を伸ばすと、ホンは首を振って、自分から数枚の紙幣を老婆に渡した。

ホンはさらにその近くで何人かに話を聞き、その都度小沢に内容を報告した。その中に、当時ダンサーだった女が、店をやっているという情報があった。場所は小沢が泊まっているマジェスティックホテルのある通りだった。小沢が歩いて行ってみたい、と主張したので、ホンは呆れたふりをしたが、それでも木陰のある道を選んで散歩に付き合ってくれた。

「先ほどのおばあさんのお礼は、いくらだったんですか」

「外国人観光客相手の人ですからねえ。小沢さんが財布を出せば、たくさん請求されます。私が出せば安くすみます。ベトナム人は商売人ですから」

とホンは笑って、金を差し出そうとする小沢の手を押さえた。

ホーチミン市の道の両側には、豊かな枝葉を茂らせたタマリンドが植えられ、さわやかな木陰をつくっていた。コロニアル風の明るい色の建物が並び、歩道に面したところは、ほとんどが小さな店になっている。雑貨や食品、電気屋、携帯電話、宝飾店まで商品であふれていた。道路はバイク、歩道は荷物を持つ人が行き交い、どこを見ても、食べたり話したり商談をしているたくさんの人がいた。ひときわ大きな街路樹がある通り際に、アルミのテーブルとイスを歩道に出したカフェがあった。小沢はホンを誘って店に入った。

「歩こうと言ったのを少し後悔しています。もう喉が渇きました」

「小沢さん、まだ半分ですよ。でもここで冷たいものを飲めば、大丈夫。がんばれます」

小沢はホンのすすめで、ミネラルウォーターとベトナムコーヒーを注文した。濃く甘い

コーヒーがうまかった。カフェは半分がオープン形式で、床には白と黒のタイルが市松模様に張られている。黒い制服を着たボーイが、タイルの上を音もなく歩き、客に飲み物を運んでいた。

「ホンさんはお元気ですね。私より年配だと思いますが」

「もうずっと前に還暦を過ぎました。ベトナムでも年に動物の名前が付いています。私は寅年ですね。苦労がないから、皺が少ない」

ホンは額の皺を手で伸ばすふりをして微笑んだ。日本とベトナムの干支の比較をしながら、ホンは一九七五年のベトナム統一前後の世情や、政治の移り変わりについて、ユーモアで包み込みながら、無知な外国人に分かるように紹介した。近藤がホンは元政府の官僚だった、という「政府」とは、「南」の政府だなと小沢は推察した。

ボーイが近付き、静かな声でささやいた。ホンが何か言うと、軽く頭を下げて立ち去った。小沢が首をかしげると、ホンは頭上に広がる街路樹の枝先を指さした。

「ほら、大きなサヤエンドウのような実があるでしょう。小沢さんはベトナムが初めてというので、記念にタマリンドを注文しました。好みに合えばいいのですが。そう、ハガキを書いた人は、今どうしているのですか？」

「わかりません。あれ以降連絡が取れないのです。といっても、彼と会ったのは、私が高校生の時で、それ以後数回手紙のやりとりをしただけです」

「長く会っていないお知り合いのハガキが気になるのですね。私の理解では、あのハガキには、アニーさんを探して欲しい、とは書いてないです。それでも小沢さんはアニーという女性のことが気に掛かる。マクリーンさんは、小沢さんに何か伝えたいことがあったのでしょうか？　それとも、とても仲の良い友だちなので、気になる？」

木漏れ日が落ちるテーブルに、蝶がとまるように静かにグラスが置かれた。タマリンドのジュースは、甘酸っぱい清涼感があり、わずかな苦みが外国にいることを思い出させる。

「友だちと言えるかどうか。ぼくは高校生で、彼は二一か二二歳の兵隊でした。アメリカ軍の軍人で、日本に休暇できていたんです」

「なるほど。そのマクリーンさんがベトナムにいたときに通った店がアーカンシェル。何十年も経ってから、たまたま懐かしくなり、旅先からのポストカードに書いて日本にいる旧友に送った」

「そう、そんなところでしょう。たまたまぼくがベトナムに観光旅行に来ることになって、ハガキのことを思い出しました」

それは話の半分でしかない、と小沢は思った。ホンは親切で気の利くガイドだ。近藤は仕事で何年もホンと付き合い、その人柄を保証している。今ホンに四十年前のことを話し

ても何の害にもならないはずだ。
「マクリーンは脱走兵だったんです。陸軍でした」
「それは大変なことですね」
ホンは静かに頷いた。
「当時の日本には、戦争に反対する雰囲気がありました。その中で軍隊から逃げたいという人を助ける人たちがいたんです。高校の先輩がそんなことをしていました。高校の夏休みの時、大学生になっていた先輩がやってきて、アメリカ人を何日か匿って欲しいと頼まれました」
「小沢さんはその仕事を引き受けたんですね」
「その通りです。本当は大学に行く勉強をしなくちゃいけなかったんですが、世界中でいろいろなことが起こっていて、ぼくはお祭りを遠くて見ているような気分でした。その兵隊を匿えば、ベトナムから戦争を無くす助けになるかも知れない、世界中の出来事に参加できるかもしれない。そんな気持でした」
「あの頃は、いろいろなことがありました」
ホンはテーブルの上に置いた自分の手を見つめていた。小さな黒い一匹のアリが、ごつごつしたホンの手の甲の上を歩いていた。
「まったく、何もかもが単純に見えました。でもぼく自身が一番単純だったんです」
「夏休みですからね。少年の頃の夏休みは、そういうものですよ」
ホンと小沢は、アリがテーブルの端から消えるまで黙り込んだ。

土産物屋のおばあさんが教えてくれた店は、マジェスティックホテル近くのドンコイ通りにあった。二車線の一見小さな通りだが、外資系のホテルがいくつかあり、両側には高級ブティックや外人相手の土産物屋が並んでいる。
その店は「ＺＡＫＫＡ」という看板を掲げた上品な店で、蔓細工や少数民族の装身具といった民芸品を並べていた。ホンが聞いた話では、オーナーのマイという女性がアーカンシェルの元ダンサーだったという。
二人が店にはいると、アオザイを来た若いベトナム人店員が日本語で話しかけてきた。小沢が「マイさんを」というと、怪訝そうな表情で店員は店の奥に消え、しばらくして真紅のアオザイを着た女性があらわれた。少なくとも六十歳を超えているはずだが、腰のまわりの豊満さを除けば、豊かな胸や形の良い足、若々しい表情など、四十代にしか見えなかった。
「私が社長のメイです。お探しものですか？」

ホンよりは訛りがあるが、メイは聞きやすい日本語を話した。並んでいる商品のことをたずね、小沢は象眼細工の箸などを買った。

「昔のサイゴンのことを調べています。メイさんが当時のことに詳しいと聞いてきました」

小沢が言うと、メイは無表情にうなずいた。

小沢はメイの表情から、複雑な話は伝わりにくいと思い、入口付近にいたホンを呼んだ。ホンの話の中で、サイゴンというなつかしい言葉が何度も出てきた。メイは次第に笑顔を凍り付かせ、時々鋭い口調でホンを遮った。そのうちメイは両手をひらひらと振り回し、厳しい口調になった。手で首を切る仕草をし、呆れたように天井を見上げて首を振った。

「帰って。何も言うこと、ない。全部おしまい」

メイは二人の手を引っ張り、店の外に連れ出した。歩道に出たホンが何か言うと、メイは激しく怒鳴り、通行人に向かって大声で話しかける。ほとんどの人は無視して通り過ぎた。

「ひとつだけ。アニーという人を知っていますか？」

メイは話しかけた小沢をにらむと「ノー」と呟いた。ていねいに整えられたメイクの目尻と口の両側に深い皺ができ、優美に描かれた細い眉に下に、太い肉の筋が盛り上がっていた。メイは店のガラス戸を閉める前に「アニー」と顔をゆがめて小さくつぶやき、小沢たちに唾を吐いた。

「メイというのは、日本語で梅という意味なんです。ベトナムは昔から中国文化がたくさん入っていて、梅はきれいで上品というイメージがあるんですね。でも、あのメイさんはちょっと違う。梅よりも梅干しでしょうか」

ホンの落ち着いた口調の冗談に、小沢は笑いだした、

「なるほど、そんな感じだ」

昼近かったので、二人はドンコイ通りの裏手にある日本料理店に入った。天ぷら定食はなかなかの味で、特に小鉢の酢の物がうまかった。

「梅干しおばさんは、何を話していたんですか」

ホンは箸を箸置きに揃えて置き、茶を口に含んでゆっくり飲み込んだ。

「ある人たちにとって、一九七五年以前の事はあまり話したくないのです。メイさんもそうですね」

「アメリカ軍相手の店にいたから？」

「それもあります。ああいった店のダンサーは、客と一曲踊ると何ドル、といった具合に金を稼いでいました。それ以外に、アメリカ兵の愛人になる女も多かった。当時のドルは

とても力があったので、彼女たちは裕福でした。でも、一般のベトナム人たちは、そういう女たちを嫌う人が多かった。パリ協定の後、アメリカ軍が撤退を始め、彼女たちの立場は弱くなります。解放後は田舎に逃げたり、恨みを買って乱暴された人も多いのです」

「マイさんは、立派な店を持って成功しているように見えますが」

「彼女は統一後大変苦労したと思います。ドイモイ後にようやくホーチミンに戻ってきて、商売をやってうまくいった。でも、彼女にはいつも恐怖があります」

「話の中でオーストラリアという言葉が出てきたような気がしたんですが」

ホンは、頷いた。

「メイさんの国籍は、オーストラリアです。ボートピープルでオーストラリアに逃げ、現地の中国人と結婚しました。それでオーストラリアのパスポートを持っています」

「旦那さんはオーストラリアに？」

「多分、形だけの夫婦でしょう。『いつでも逃げられるんだから、あんたなんか怖くない』って言ってました。もっと別の人を当たってみますか？」

小沢は「また明日連絡する」と答え、二時から用事があるとうホンと、店の前で別れた。小沢が「ガイド料」として差し出した金を、ホンはどうしても受け取らなかった。

街路樹の影から出ると、強烈な陽射しが押さえつけるように降り注いでいる。小沢は、光と影のコントラストの強さにめまいがした。日本料理店のクーラーに慣れた体が熱気に包まれ、溶けていくような感じに襲われた。

昼休みの休憩時間か、扉を閉めている店も多い。歩道にビーチ用の長いすを持ち出して寝ている人もいた。通りを走るバイクの量も少なく、止むことがなかった騒音が途切れ、その静寂が耳の奥に響いた。

マジェスティックホテルの近くに来ると、とまった数台のシクロの運転手が、出入りする外人客に声をかけている。小沢は呼び止める声を無視してホテルに入った。フロントで日本の妻からのメッセージを聞き、部屋に戻って電話をした。子どものことと、お土産の注文だった。だるい足を引きずりながら、ビジネスセンターにいって、苦労してパソコンのメールの設定をし、仕事用に来ていた手紙を読んで、緊急性の高い数本に簡単な返事を書いて送った。

売店でミネラルウォータを買って部屋に戻ると、後は夜近藤と会うまで用事が無くなった。シャワーで体を洗い、水をボトル一本分飲み干した。部屋の中はクーラーがよく効き、すぐ汗がひいた。薄いカーテン越しに差し込む陽の光も、路上に比べるとずっと穏やかに感じられる。ベッドに横になり、天井でゆっくり回っているファンを見上げながら、小沢

は四十年ほど前のサイゴンを想像してみた。学生時代に見たベトナムの映像は、ほとんどが戦争に関係したものだった。米軍機の空爆、戦火に逃げまどう農民、Ｍ６０を構える海兵隊といったものだ。街の様子は浮かんでこない。

ホンによると、確かに高層ビルが増えたが、ホーチミンの街のたたずまいは、サイゴンの頃からあまり変わっていないという。アーカンシェルのあった建物も、改装されたがほぼ同じだという。

あそこにナイトクラブがあり、着飾ったベトナムの娘たちが、アメリカ兵たちと踊る。通りに音楽と照明がもれ、路上のタクシーやシクロの運転手たちが、暗闇でじっとうずくまる。ダンサーの中には若い頃のメイや、多分アニーと呼ばれる娘もいたのだろう。確かに四十年前のこの町で、アメリカ人の若者が、アニーという娘に夢中になった。それが自分をここまで運んできたのだ、と小沢は思った。

高校生三年の夏、小沢は奥秋から、脱走兵の話を聞いた。奥秋は、小沢の高校の新聞部の先輩で、東京の大学に通っていた。奥秋は小沢を、高校の頃たまり場だった高崎市の喫茶店に呼び出した。しばらく会わないうちに、奥秋は髭を生やし、随分大人びた風貌になっていた。

店の一番奥の暗い席で、奥秋はささやくような声で話した。小沢は聞き漏らさないように、テーブルに身を乗り出した。先輩の服はタバコとガリ版のインクのにおいがした。奥秋は、アメリカの兵隊を船に乗せて海外に送りたいと言った。そのため新潟に連れていくが船の準備がまだ整わない。東京にいると目立つので、前橋か高崎あたりで数日匿いたい。その手伝いをして欲しいと小沢に話した。もちろん、秘密を守ることが絶対の条件だ、と大学生は後輩を鋭い目でにらんだ。

前橋駅近くに小沢の実家の小さな倉庫があることを、奥秋は知っていた。高校の文化祭の時、奥秋と小沢たちがそこで展示物の準備したことがあった。駅の南側で、当時は倉庫や空き地だらけの場所だった。水道とトイレはあるが、後はただのがらんとしたバラックだった。

先輩の奥秋は、高校時代から世界中の事件や歴史について、自信あふれる口調で、みんなに語りかけるのが得意だった。すべてが光か影の二つに峻別されていた。聞くものたちも、彼に従うか、反発して離れるかのどちらかだった。小沢は考えれば考えるほど、迷路に入っていくような気がした。一方で、奥秋の学生運動の話はまるで冒険小説のように思えた。巨大な嵐が近付いているのに、みんなは気づいていない。奥秋の話は、絶対に外れない天気予報のように響いた。

数日倉庫を貸し、食事を運ぶくらいならいいだろう。何しろ人助けをするのだと小沢は思った。奥秋によれば、歴史的な正義ということだった。何より高校最後の夏休みで、小沢は何かをしたかった。

ベッドサイドの電話の音で小沢は目を覚ました。フロントからで、ゆっくりした英語で「あなたが呼んだシクロが来て待っている。正面入口に来てください」と聞き取れた。シクロを呼んだ覚えはない、と答えようとしたが、その前に電話は切れた。

またシャワーを浴び、水を飲んだ。腕時計を見ると、五時過ぎだった。まだ窓の外は昼間と同じように明るい。デイバッグに地図と水のボトルを入れてロビーに降りた。足と腰が痛かったが、少し休んだせいで気分は爽やかだった。

フロントに行くとドアマンが来て小沢を案内した。外のむっとした熱気は変わらない。何台も止まっている客待ちのシクロの中で、一番遠い車に連れて行かれた。ボーイが老人のシクロ乗りに声をかけた。彼は自転車のサドルのような座席に座り、その前に付いた客席を指さした。ボーイはお辞儀をしてホテルに戻っていった。

「二時間十ドル。街を回る」

片言の日本語だった。

「シクロは呼んでいない。誰か他の日本人の間違いだろう」

「だいじょうぶ。昔のサイゴンの名所に行く」

まだ明るいし、夜までシクロで街見物もいいか、と思って小沢は十ドル札を差し出した。

「お金、あとでＯＫ」

自転車の前輪部分を二輪にして、間に座席を付けたようシクロが走り出した。老人の漕ぐシクロは、他のシクロよりもひどくのろかった。観光客を乗せた若い漕ぎ手のシクロが、次々と小沢を追い越す。中には罵声を浴びせていくシクロもあったが、老人はまったく気にしなかった。

所々で老人は達者な英語で名所の解説をした。小沢がゆっくり話してくれと言うと、老人は簡単な単語を選び、小沢に確認しながら、分かりやすく解説してくれた。教会、旧大統領官邸、市民劇場、アメリカ大使館、郵便局など、街の風を受けながら見る風景は、また違った印象がある。ベトナムに来た最初の日、バスで回った「半日観光」よりも、ずっとおもしろいと小沢は思った。

「ここに昔テレックスセンターがあった。自由主義陣営の新聞記者は、みなここから記事を送った。戦争のニュースの大半は、ここから世界に流れた」

タインは古びたビルの前でシクロを止め、淡々と説明した。

「テレックスセンターは、普通の観光案内のコースには、入っていないと思う」
「あなたはジャーナリストだろう。土産物屋のチさんから、昔のサイゴンを案内してくれと言われた」
「チさんというのは、ニューワールド近くの土産物屋のおばあさん？」
「ああそうだ。彼女からマジェスティックに泊まっているオザワを案内してくれ、と紹介された」
「あなたは、タインさん？」
「私の名前は、グエン・ゴック・タイン」
小沢は簡単に事情を説明した。タインは肩をすくめ、二、三度首を振った。
「本当に昔の話だ。私は、そのアニーという女性は、知らない」
「当時の店の様子については、知っているのか？」
「多少は」
「それでいい。まだ暑い。どこか店に入って飲み物でも飲まないか」
タインはとまどったように、自分を指さした。
「これでは、外国人の入る店には、入れてもらえない」
カーキ色の半ズボン、首のところが伸びきった汗まみれのTシャツにゴム草履だった。
「じゃあ、ベトナム人の入る店に行こう。私はベトナム人の店にいれてもらえるか？」
と小沢が自分の服を指さして笑うと、初めてタインは顔をほころばせた。
「まあ、まあだな」
タインがシクロを止めたのは、「ヤンシン」と入口の上に書かれた、小さな市場の前の店だった。野菜屑やゴミが散らばった路上に、風呂場で使うような低いプラスチックのイスと、木製の座卓のようなテーブルが並んでいた。客は半裸の男や、荷物を抱えたおばさんたちで、フォーや丼飯の食事を取っている。客が何人かタインに声をかけ、彼もうなずいた。タインは木陰の空いた席に小沢を案内した。タインが「ここのフォーガーはうまい」というので、小沢はそれを頼んだ。
「マジェスティックホテルのカフェよりはイスが固いが、サービスは似たようなものだ」
と、タインがにやりと笑った。
「私は英語が話せない。ゆっくり分かりやすく話してくれ」
「お互いに」
店の少女が、麺の入ったどんぶりと、グラスを運んできた。澄んだスープはあっさりした味付けの中にコクがあり、歯ごたえのある麺と良くあっていた。ベトナムに来てから一番うまいメシだ、と小沢はタインに言った。

タインがグラスを差し出したので、小沢はグラスを軽く当てた。緑色をした液体で、濃厚な甘酸っぱさがあった。氷が入り、冷たくてうまい。
「これは何だ？」
「アボガドのジュースだ。外人は氷が好きだからな」
タインはフォーを食べながら、アーカンシェルとの関わりを淡々と話した。彼は元南ベトナム軍の将校だった。アメリカ軍の将校との連絡係をしていたことがあり、夜の付き合いも多かった。アーカンシェルにもよく行った。ダンサーや米兵目当ての女が沢山いた。アニーという名前の子もいたかも知れないが、顔は覚えていない。
「あなたは、そのアニーを捜してどうするのか。昔付き合っていたアメリカの兵隊のハガキを見せるのか。その兵隊のことを女から聞きたいのか」
「よくわからない。ベトナムに来る機会があったので、知人の思い出の場所に、センチメンタルジャーニーしたかった。多分そんなところだろう」
タインはまた肩をすくめ首を振った。店の子を呼び、小沢の空になったグラスに飲み物を注がせた。
「そのアメリカ人は、推測すると将校ではなく兵隊だ。あの店では、兵隊は大事にされなかった。いつの時代でも将校と兵隊はすべてが違う。兵隊には兵隊の楽しむ場所や、死ぬ場所がある。将校には将校の楽しみ方や、死に方がある」
タインは、彼の癖らしい肩をすくめる動作をした。物売りの女を呼び止め、木の葉に包んだ団子のようなものを二つ買い、一つを小沢にすすめた。米を蒸して作ったチマキに似た団子だが、具は肉と野菜の煮物だった。
「日本にこれと似た食べ物がある。でも甘い」
タインは信じられないという表情をした。
「十年くらい前、シクロに乗せた日本人に、日本料理の店に連れていってもらったことがある。日本料理はみな甘いと思った。私は北部出身なので、塩辛いのが好きなんだ」
「でも南ベトナム政府軍にいたんだろう。北部の人間がなぜ？」
タインはTシャツの胸元から首に提げた十字架を取り出してみせ、すぐしまった。
「クリスチャンか？」
「北部のカトリックは、みな南に逃げてきた。わたしたちは南部の人間よりも一生懸命戦ったよ、最後まで」
またタインは肩をすくめた。
市場の香料売り場に近いのか、あたりには刺激的なにおいが充満していた。その中には道路に捨てられた野菜屑の、腐敗の始まりの甘ったるいにおいも混じっていた。

「私はその頃学生で、テレビで戦争のニュースを見ていた」
「そんなものさ」
タインは立ち上がり、店の子に金を払った。シクロを点検し、タイヤに空気を補充した。小沢は路上のキオスクで、水のボトルとタバコを買い、タインの運転席に置いた。タインはちょっと頭を下げて席の下の物入れに納めた。小沢はまたシクロの客になった。
「ああいう店の女は相手によって名前を変える。その兵隊は、女にとって大勢の中の一人だ。彼は若かったので、ゲームが現実だと思った。年を取れば、現実をゲームだと思って生きた方がいい」
タインは小沢をマジェスティックホテルの前で下ろした。
「十ドルだ、食事込み。タバコはありがとう」
「一枚はおれの分、もう一枚は例のハガキの米兵の分だ」
小沢は二枚の十ドル札をタインの手に押し込んだ。タインは例によって肩をすくめるとそれをポケットにしまった。
「あと何日かホーチミンにいる。もしあんたのシクロに乗りたくなったらどうする？　どこに住んでいるんだ？」
「これが家」とタインはシクロを指さした。「前は地面の上だった。ホーチミンに出てきてから、わたしも随分文明的になった。さっきのボーイに金を渡して『タインのシクロ』言っておけばいい。一日に何度かこのホテルにも回ってきている。ボーイのチップは一ドルだぞ。それ以上は渡すな」

高校三年の夏、小沢はアメリカ人の脱走兵を匿った。アメリカ兵を隠した倉庫は、駅の裏手の寂しいところにあった。奥秋から話のあった翌日。実家からこっそり持ち出した鍵で倉庫を開け、自転車で毛布や洗面具などを運んだ。奥秋と友人だという三人が、レニー・マクリーンを連れてきたのは、その三日後だった。小沢は国鉄前橋駅の改札で彼らを迎え、倉庫に案内した。
マクリーンはポロシャツにジーパン、大きなボストンバッグを提げ、庇の深い帽子をかぶっていた。大柄な奥秋よりも背が低く、サングラスをすればそれほど目立たない。東京から来た奥秋たちは、倉庫に行く前にあたりをぐるぐると歩きまわった。奥秋は「尾行が心配だ」と言った。畑の多い駅の裏手で通行人もほとんど無く、かえって目立つと小沢は不思議に思った。
東京から来たうちの二人はすぐ帰り、奥秋と藤井という学生、それにマクリーンが残った。倉庫には、売れ残りを詰めた段ボールが幾つかと古い自転車、使っていないタンスな

どがあるだけで、ほとんどが空だった。片隅にパーティションで仕切った事務所があり、彼らはそこに空の段ボールを敷いてベッド代わりにした。小沢は図書館に行くといって家を出、毎日倉庫に通った。一日に二、三回、奥秋に命じられた品物や、食べ物を買いに出た。必要な金は、奥秋が渡してくれた。

奥秋はその若いアメリカ人に日本語で話し、それを藤井が英語に訳した。ベトナム戦争や、世界の情勢についての長い話だった。アメリカ人はたまに相づちを打ったが、自分から話すことはほとんど無かった。奥秋は話疲れると、本を読んだりノートに細かい字で書き込んだりしていた。小沢は持ってきた受験の参考書を開いたが、ほとんど頭に張らなかった。静かなアメリカ人は、小沢が駅の売店で買ってきた英字新聞を読むか、高いところに付いた小さな窓の向こうの空を見つめていた。

四日目の朝、小沢は予備校の夏期講習という口実で倉庫に行った。奥秋は「東京に用事で行ってくる。明日の朝迎えに来るから、彼の世話を頼む。どこにも出さないでくれ」と言って、藤井と出て行った。

取り残された小沢は、狭い事務室でマクリーンと二人になった。数日暮らしただけだが、事務室にはたくさんのゴミが散らばっていた。小沢が片付け始めるとマクリーンも手伝った。近付くと米兵から汗のにおいがした。小沢は倉庫の片隅にたらいを置き、事務所からホースで水を引いた。とまどいながら英語で体を洗えというと、マクリーンはタオルと石けんが欲しいと答えた。小沢は急いで近くの雑貨店で買って戻ってきた。

遠くの集積場にゴミを捨てて戻ってくると、すっかりきれいになったマクリーンが、短パン一つで柔軟体操をしていた。小沢は倉庫に転がっていたバスケットボールを自転車の空気入れで膨らました。天井にむき出しになってる鉄骨の梁をバスケットに見たてて、小沢がトスをしてみると、マクリーンもマネをした。トスは小沢の方がうまかったが、マクリーンのドリブルは天才的だった。ボールを転がしているうちに、何となくルールが決まり、二人はゲームに夢中になった。外が暗くなり、事務所に移って明かりを付け、布でテントのように覆った。小沢が持ってきたコーラのボトルを差し出した。米兵はにっこり笑って「冷えてない。でもうまい。サイゴンと同じ味だ」と小沢に言った。「ぼくのことはレニーと呼んでくれ」。

それから深夜まで、小沢とマクリーンはいろいろなことを話した。予備校用に持ってきたコンサイスの辞書が役に立った。小沢はレニー・マクリーンがオレゴンの貧しい農家の出身で、高校卒業後、製材会社で働き、徴兵されて軍隊に入ったことを知った。ベトナムではトラックの運転が主で、敵に向かって銃を撃ったことはない。初めての休暇で日本に来たが、いいところだ、奥秋たちとは、基地の近くの飲み屋にあったビラがきっかけで知

り合った、などとマクリーンは語った。
小沢が意外だったのは、マクリーンが脱走したのは、ベトナムに戻るのが嫌だからではなく、逆にドイツに移動させられるからだった。サイゴンで知り合ったアニーという女性と別れたくない、もし、ドイツに行けば何年も会えなくなり、彼女はどこかに行ってしまう。だから脱走してスウェーデンに行き、彼女を呼んでヨーロッパで暮らしたい、と話した。
「奥秋さんは、ぼくにある声明にサインをしてくれと言っている。彼のグループの主張は正しいと思うが、ぼくの意見ではない。ぼくはアメリカが勝てばいいと思っているし、政治には関心がない。ただアニーと暮らしたいだけだ」
「彼女はどうしたいと、言っているんだ？」
「サイゴンで、ぼくのことをずっと待っている」
翌朝、奥秋と最初の二人の学生が来て、マクリーンを連れて出て行った。
「ありがとう。昨日は日本に来て一番楽しかった。またいつか会おう」
と、マクリーンは言った。
小沢は奥秋から、マクリーンには、食べ物と服以外は、何も渡してはいけない、と厳命されていた。特に人名や住所が書かれたメモや文書は、禁止だった。マクリーンはあとで手紙を出したい、といい、小沢が言う実家の住所を、がんばって暗記した。
「レニーから」と書かれたエアメールが来たのは、それから二年後だった。

夜、小沢はホテルの八階のバーで近藤と会った。朝の混雑に懲りたのか、近藤が窓際のカウンター席を予約しておいたので、二人はホーチミンの美しい夜景をゆっくり楽しむことができた。
「だいたいそんな所じゃないかと思ってたよ。午後ホンと会ったけど、四十年前の人捜しは難しいと言ってた。日本だって四十年たてば街並みが変わるだろう、ここは国が変わったんだから」
小沢の話を聞いて、近藤はそんな感想をもらした。二人はビールを飲み干し、バーテンにカクテルを注文した。
「今だから言うけど、学生の頃は小沢がうらやましかった。一人で大人の世界に足を踏み込んでるみたいだったし、アメリカ兵と関わって反戦運動するなんて、すごくでかいことじゃないか」
「たまたま、実家にあんな空き倉庫があったから、奥秋さんがぼくに声をかけたんだ。マクリーンがいる間も、ただメシを運んだだけで、何もしてない」

「第一、そのことをおれに打ち明けたのが二年たった後だろう。おれなら自慢してすぐ話しちゃうと思うが。じっと秘密を守っていたというところが、ちょっとかっこよかったぞ」
「奥秋先輩から、話すなっていわれていたからな」
「先輩と藤井さん、マクリーンのことを聞いたのも、何年も経ってからだ」
「いやあ、本当にそれだけだったんだ」
「マクリーンは、結局アニーには再会できなかったんだろう？　軍隊を脱走して、しかも政府と軍隊を批判するあんな声明を出したんだ。おまけにソ連に亡命したんだから、アメリカとしても簡単に許すわけにはいかない。お前の所に昔来た手紙の話だと、冷戦が終わったあと、アメリカに帰って軍法会議を受けたそうじゃないか。刑務所は何年入っていたんだ？」
「三年と書いてあったかな。あとは公民権停止何年とか」
「あのハガキは、刑務所を出たあと、昔を懐かしんでお前に出したんだろうな。ある意味、あの夏、彼の人生が変わったわけだ」
「そうかも知れないね。でも四十年間で何通かの手紙じゃ、推察するにも材料が乏しすぎる」
　近藤はポケットから携帯電話を取りだし、バイブを止めてから相手のナンバーを見て、そのままカウンターに置いた。
「なあ小沢。おれは一度奥秋先輩の見舞いに行ったことがある。施設から実家に戻った頃だ」
「どうだった？」
「ほら、彼は内ゲバで頭をやられたろう。だいぶ良くなってはいたが、言葉とか、歩く時に多少支障が出る。それ以上に弱気になってね。昔とはまるで別人だ。確かに脱走の手助けは分からないでもない。その後、先輩は先鋭な方向に行っちゃって驚いたよ。おれも学生の頃は、少しは集会とかデモにも出たけど、奥秋先輩みたいな純粋な生き方はできなかったな。でも、あれはあれなりに立派だったと思うよ」
　カウンターの上で近藤の携帯が震えた。今度は電話に出て日本語と英語で指示を与えた。近藤は電話を終えると「腹が減った」とクラブサンドイッチとビールを注文した。小沢はホットドッグと水を頼んだ。
「打ちあげ話でもないが、一つ近藤に話しておきたいことがある」
　サンドイッチを噛みながら近藤は「何だ？」という顔をした。
「学生で東京にいた頃、奥秋先輩が何度か会いに来たことがある。もうあのグループのリーダー格になっていた頃だよ。ほら、ぼくのいた大学は、先輩がいたのと違うグループが

押さえていたろう。それなのに大学近くの下宿に来るんだから、大胆だと思った」
「おれのとこにも来たなあ。小沢も一緒にやろうって誘われたんだろう。おれは単位取るのと、就職活動で忙しいって断ったけどね」
「近藤のそういうところに感心するんだ。いや本当にそう思うんだよ。ぼくも断ったんだが、きっと優柔不断に見えたんだろうな。集会とか勉強会とか、いろいろ誘われた。その頃マクリーンから二通目の手紙が来た。フィンランドからだ。一番長い手紙で十ページくらいあった」
「その話は初めて聞くな。で、マクリーンは何て？」
「やったことは後悔していないが、政治家の言うことはみんなウソで、政治は嫌いだ。アメリカには、もう帰れないだろうって」
「分かるよ、政治は汚いし、政治家はあこぎだ」
バーテンが皿やカップを片付け、二人は軽い飲み物を注文した。朝のテラス席と違って、ここには街の騒音も、熱帯の果物のにおいも入ってこない。間接照明が壁に掛かったモダンな作風の版画を上品に映し出し、磨かれた窓ガラスの向こうに、真っ黒なサイゴン川の流れが見える。
「最後に先輩に会ったとき、特別研修会というのに誘われたんだ。誰かの下宿でやる小さな集まりだということだった。ほらその頃先輩は大学をやめて、隠れ家みたいな所を渡り歩いていたろう」
「地下生活ってやつか。こっちからは連絡ができなかった」
「次の日大学に行くと、教室に自治会の委員が来て何か演説していった。ぼくは後ろでずっと本を読んでいた。その委員に、配布物があるので学級委員は付いてこいと言われた。ちょうどぼくの番だったんだ。地下にあった印刷室に始めていったよ。その時そいつに奥秋先輩の研究会の場所のことを話した。日時と場所も」
近藤がゆっくりした動作で顔を上げ、小沢を見た。小沢が目を合わせると、顔が充血し鼻に汗が浮かんでいる。
「それは先輩が襲われて怪我をしたあの事件のことか。前の日に集まる場所を言っただって。そのことの意味が分かっているのか」
「ああ分かっている」
近藤は激した言葉で小沢を罵ったり、謝ったり、また怒ったりした。しばらくして近藤は疲れたように両手をカウンターに投げ出した。
「わからん。事件とは無関係かも知れない。でもその委員というのは明らかに先輩の敵側の連中だ。情報を知れば、何かしたに違いない。それ以上にお前が分からない。お前はそ

っち側だったのか」
「ぼくは、どっち側でもない。でも、さっき近藤がぼくについて言った『人殺し』とか『裏切り者』という言葉は、その通りだ。確かにぼくはそんな人間だ」
しばらく二人は黙って酒を飲み、暗い川の流れを見つめた。眼下の通りは、夜になっても賑やかで、オートバイのライトが、ホタルの乱舞のように見える。音もにおいもない向こう側の光景は、思い出のようにきれいだった。
「帰ろうか」
小沢が言うと、近藤がのろのろと立ち上がった。
「飲み過ぎたな。もう年だ」
と近藤が言って、カウンターの上の電話をポケットに入れて、ふらふらと歩き出した。小沢はバーテンに言って勘定を済ませ、近藤の後を追った。
立っているのも大変そうな近藤の腕を支え、小沢はホテルの前でタクシーを呼んだ。近藤はタクシーに乗る直前、腫れぼったい目で、一瞬小沢を凝視したが、そのまま席に座り込んで言った。
「じゃあな。また明日連絡するよ」
小沢は頷いてドアを閉めた。
すぐ部屋には戻らず、小沢は夜の通りを歩いた。鳴りやまないクラクションや無数のエンジン音が建物の間に反射し、むしろ日中よりもうるさいくらいだった。通りの向こうの暗い方からは、重く澱んだ川のにおいが漂ってくる。
昼間寄ったメイの土産物屋は、ホテルの隣のブロックにあった。中年女が閉まったシャッターの前の歩道にビニールを敷き、露店を開いている。並べられた大小の竹かごには、色とりどりの果物が盛られていた。名前も分からない変わった形のものが多かった。どれも熟し、濃密な香りを放っている。薄暗い街灯の下で、すべての果物が輝いていた。